

| | | | | | |
|-------------------|-------------------------------------|-----------------------------|---------------------|------|-----|
| 大項目 | 2 | 持続可能な社会の実現に向けた地球的課題と国際協力 | | | |
| 中項目 | 2-2 | 地球的課題とは何か | | | |
| 小項目 | 2-2-3 | 地球規模の経済の拡大（グローバル化）の中での地理的問題 | | | |
| 細項目 (発問) | 2-2-3-3 アグリビジネス | グローバル化は、農業にどのような影響を与えたのですか | | | |
| 作成者名 | 矢ヶ崎 典隆 | 作成/修正年 | 2017/2021/2023/2024 | Ver. | 1.3 |
| キーワード 5~10 個程度 | 自給的農業、商業的農業、アグリビジネス、機械化、多国籍企業、発展途上国 | | | | |

発問と説明

(1) なぜ、食料の生産と流通はグローバル化してきたのでしょうか。

人間はもともと自然環境を利用して、野生の植物を栽培化し、野生動物を家畜化することにより、食料を安定して入手することができるようになりました。こうして、自分が消費する食料を自ら生産するような農業、すなわち自給的農業が発達しました。しかし、農業技術の発達、作物や家畜の改良、人間の移動、輸送手段の改善、貯蔵技術の発達、そして都市に居住する消費人口の増大に伴って、農産物は商品として流通するようになりました。その結果、農作物を販売して利益を得る農業、すなわち商業的農業が発達するようになりました。

20 世紀に入ると、技術革新が特に顕著になりました。大型の農業機械の開発と普及によって、牛や馬などの役畜の役割が大幅に縮小しました。保冷装置の発達によって、野菜、果物、肉類など、腐りやすい農産物の長距離輸送が可能になりました。化学肥料や農薬の普及によって、生産性が向上しました。このように、農業はしだいに工業の特性を持つようになり、これは「農業の工業化」と呼ばれます。

20 世紀後半には、農業の生産と流通において、大企業の役割が大きくなりました。このような企業はアグリビジネス企業と呼ばれ、食料をめぐるグローバル化に大きな役割を果たしています。その一方で、昔ながらの方法で小規模に農業生産を行う伝統的な農業と農業生産者は、苦しい立場に追い込まれてきました。

消費者の立場から見ると、グローバル化に伴って、世界中から多様な食材が手に入るようになりました。特に日本のような先進諸国では、多様な食材を入手することができます。先進諸国の消費者を顧客とする専門的な農業形態も生まれています。私たちの食卓は、世界中の生産者と結びついています。食料の生産・流通のグローバル化は、食文化のグローバル化を引き起こしています。

(2) アグリビジネス企業は、食料の生産と流通にどのような役割を果たしているのでしょうか。

アグリビジネス企業とはどのような企業なのでしょうか。アグリビジネスは、Agriculture（農業）と Business（事業）という二つの英単語を合成してつくられた用語です。1950 年代にハーバード大学の研究者が使用してから、広く使われるようになりました。アグリビジネスは、日本語では農業関連産業と訳されますし、農業関連産業に従事する企業を指して使われます。

農業関連産業は、生産、加工、流通、資材供給の 4 つの部門に大きく分類することができます。生産部門とは、文字通り、農作物を生産する部門です。加工部門には、製粉、缶詰、搾油、食料品製造など、農作物の加工と商品化の事業が含まれます。流通部門には、穀物倉庫、農産物輸送などが含まれます。資材供給には、農業の生産などに必要なさまざまな資材の生産が含まれます。農業機械、種子、肥料、農薬、箱など、農業には多様な資材が必要になります。

農業関連企業は、複数の農業関連部門に進出することにより、すなわち、垂直的統合によって、大規模化と合理化を進めます。また、同一部門の他社を合併吸収することにより大規模化を図り、競争力を高めます。これは水平的統合と呼ばれます。このようなアグリビジネス企業は、国境を越えて活動する多国籍企業です。

それでは、いくつかの事例を見ていきましょう。アメリカ合衆国の企業は早くから多国籍化しました。アメリカ企業のなかで最も早くから外国に進出したのは、アメリカ市場にバナナを供給するためのバナナプランテーションを経営する会社でした（表 1）。ユナイテッドフルーツ社は、もともとボストンフルーツ社として誕生し、ユナイテッドフルーツ社として事業を拡大しました。すでに 19 世紀末にジャマイカ、ドミニカ共和国、パナマでバナナプランテーションの経営を始めました。その後、特に中央アメリカにバナナプランテーションを経営す

表1 ユナイテッドブランズ社のラテンアメリカへの進出

| 地域 | 進出年 | 業種 | 社名 | 出資比率% |
|---------|-----------------|-------------------------------------|----------------------------------|-------|
| ジャマイカ | 1885 | バナナ農園 | ? | ? |
| | 1930s | 製糖工場 | Bernard Lodge Sugar Co | ? |
| ドミニカ共和国 | 1898買収 | バナナ農園 | ? | ? |
| | 1950s (1960s売却) | マッシュバナナ加工 | ? | ? |
| コスタリカ | 1889 | バナナ農園農園・鉄道 | Cia Bananera de Costa Rica | ? |
| | 1902 | 鉄道 | Northern Railway | ? |
| | 1951 | パーム油加工 | ? | 100 |
| | 1962 | バナナ用箱 | ? | 100 |
| | 1965買収 | 野菜油・マーガリン | Numar SA | 100 |
| | 1968買収 | プラスチック袋・パイプ | Polymer SA | 100 |
| | 1971合併 | プラスチック製品 | Polipak de Costa Rica SA | ? |
| パナマ | 1899 | バナナ | Chiriqui Land Co | ? |
| | 1925 | 実験農場マニラ麻 | ? | 100 |
| | 1927買収 | バナナ事業 | Chiriqui Land Co | ? |
| | 1962 | バナナ用箱 | ? | 100 |
| | 1966買収 | ポリエチレン袋・パイプ | Productos Plasticos SA | 100 |
| | 1966買収 | ポリエチレン袋・パイプ | Polymer Extrusion SA | 100 |
| | 1969 | バナナ加工・ベビーフード | Cia Processadora de Frutas | 100 |
| キューバ | 1901(1960国営化) | 製糖工場 | ? | 100 |
| | 1907買収(1960国営化) | 製糖工場 | Nipe Bay | 100 |
| | 1913買収 | サトウキビ農園 | Saetia Sugar | ? |
| | 1938買収 | ドクターミナル | ? | ? |
| ホンジュラス | 1913買収 | バナナ農園・鉄道 | Tela Railroad | ? |
| | 1929買収 | 製糖工場 | Cuyamel Fruit | ? |
| | 1950 | パーム油加工 | Unimar | ? |
| | 1963 | バナナ用箱 | ? | 100 |
| | 1965 | バナナピューレ・ベビーフード | Agricola Rio Tinto SA | 100 |
| | 1968 | 食用油 | Cia Numar de Honduras SA | 100 |
| | ? | ? | Empresa Hondurena de Vapores SA | 100 |
| | ? | ? | Frig Hondurena SA | ? |
| ? | 農産加工 | Productos Acuaticos y Terrestres SA | ? | |
| ? | ゴム・プラスチック・合成化学 | Polymer Industrial SA | ? | |
| グアテマラ | 1990s | 鉄道 | Int'l Railway of Central America | ? |
| | 1924買収(1972売却) | バナナ | Cia Agricola de Guatemala | ? |
| | ? | プラスチック・合成化学 | Polymar | ? |
| | ? | ? | Quellenhof GmbH | ? |
| ペルー | 1964買収 | 魚粉・魚油 | ? | 33 |
| メキシコ | 1966買収(1977売却) | 食品加工・缶詰 | Clemente Jacques y Cia SA | 100 |
| ニカラグア | 1968 | バナナ事業・タバコ | Cokra Development Co | ? |
| | 1968買収 | 食用油 | Aceitera Corona SA | 77 |
| | ? | プラスチック・合成化学 | Polimeros Centro-americanos | ? |
| | ? | 果物野菜加工 | Aceitera Corona SA | ? |
| グアドループ | 1970 | バナナ | ? | ? |
| エクアドル | ? | バナナ | ? | ? |
| ケーマン諸島 | ? | プラスチック・合成化学 | Polymer United | 100 |
| | ? | ショートニング・食用油 | Unimar | ? |
| コロンビア | ? | 野菜 | Cia Frutera de Sevilla SA | ? |

Burback, R. and Flynn, P. 1980. *Agribusiness in the Americas*, New York: Monthly Review Press, pp. 279-280による。

矢ヶ崎典隆『食と農のアメリカ地誌』東京学芸大学出版会, 2010年, p. 139より転載。

るとともに、バナナ輸送用の鉄道を所有し、地域の社会と経済に支配的な影響を及ぼしました。その活動は「バナナ帝国」と呼ばれました。現在でもチキータブランズ社として、日本でもなじみの深いバナナ会社です。

アグリビジネス企業の中には、自ら農作物を生産することなく、世界の農産物の価格を支配してきた企業もあります。典型的な事例は、巨大穀物商社のカーギル社です。19世紀半ばにアイオワ州の穀物会社として誕生したカーギル社は、穀物の売買、加工、流通に従事することにより、巨大穀物商社となり、グローバルな穀物価格の決定に大きな影響力を及ぼすようになりました。本社はミネソタ州ミネアポリスの郊外にあります。食肉産業を含む多角的な食品関連事業を中心として、海外にも積極的に投資する多国籍アグリビジネス企業です。

私たちが日常的に食べる肉のかなりの部分は輸入肉です。牛肉、豚肉、鶏肉の生産と流通にはアグリビジネス企業がかかわってきました。アメリカ合衆国のグレートプレーンズは企業的な牧畜業の中心です。大規模灌漑農業で生産されたトウモロコシを飼料として、牛が企業的フィードロットで肥育され、最終的に大規模食肉工場で箱詰め冷凍肉に加工されます（図 1）。豚についても大規模養豚業が営まれ、大規模食工場加工されます。こうした食肉のかなりの部分は輸出用です。

最近では、バイオテクノロジーの発達により、遺伝子組み換え作物の開発が盛んに行われています。農業生産者は、種子を開発・販売する企業へますます従属するようになってきました。代表的な事例は、アメリカ合衆国に本拠を置く多国籍アグリビジネス企業のモンサント社です。自社の種子を販売することにより、グローバルな影響力を強めています。

(3) アグリビジネス企業は、世界の農業地域にどのような影響を及ぼしたのでしょうか。

グローバル化が進む今日、ある地域の農業は、他地域の農業、そしてグローバルな動向を踏まえなければ理解することは難しくなっています。例えば、図 2 に示したように、アメリカ合衆国の農業と発展途上国の農業は密接に結びついています。多国籍アグリビジネス企業の活動、そしてグローバル化は、結果的に、発展途上国の農業の衰退や貧困を引き起こす原因となることがあります。

ブラジルの事例を考えてみましょう。アメリカ系アグリビジネス企業は、ブラジルに進出して大豆加工の拠点を形成し、大豆生産を助長しました。その結果、ブラジルは世界有数の大豆の生産国・輸出国になりました。ところが、企業的な大豆生産は、ブラジルの農業地域に大きな影響を及ぼしました。もともとブラジルでは大土地所有の形態が主流で、ファゼンダと呼ばれる大牧場が大きな面積を占め、地主（ファゼンデイロ）は大都市に住む不在地主でした。広大な土地には、モラドールと呼ばれる住み込み労働者が何世代にもわたって生活していました。彼らの家畜の世話、農作業、土地の管理など、地主のために労働を提供する代わりに、農場内の資源を利用して自給的な生活を続けることができました。農業生産の点ではファゼンダの生産性は低かったわけですが、多くの人々が居住できる空間でした。しかし、アメリカ系アグリビジネス企業の進出によって加工用の大豆の需要が増大すると、地主が大規模機械を利用した大豆栽培に乗り出し、住み込み労働者は農から追い出されました。彼らは大都市に移動して、スラムの住民にならざるを得ませんでした。グローバル化による大豆栽培によって、ブラジルの農村社会は変貌し、都市の貧困が作り出されました。

一方、日本のような先進国でも、グローバル化はさまざまな課題を引き起こしています。世界スケールでの食糧生産の分業体制ができましたが、その結果、輸入食料への依存度が高まっています。日本の食料自給率は極端に低くなっています。また、グローバル化によって、食の画一化も進行してきました。特に、ファストフードチェーンは、世界中の人々の食生活に大きな影響力を及ぼしています。

(4) 農業のグローバル化に対して、反対するような動きがみられますか。

以上のようなグローバル化の進展に対して、反グローバル化の動きも見られます。世界各地で、地産地消の運動、スローフード運動、食の安心と安全を求める動きが進行しています。グローバル化が進めば進むほど、人々の地域へのこだわりも活発化しています。カナダのバンクーバーに住むスミスとマッキノン は、住宅から 100 マイル (160km) 以内で得られる食材のみに依存して 1 年間を過ごし、『100 マイルダイエット』という本を出版しました。この本は大きな反響を引き起こしました。すなわち、グローバル化とともに、ローカル化についても、地理学の観点から同時に考えることが必要です。

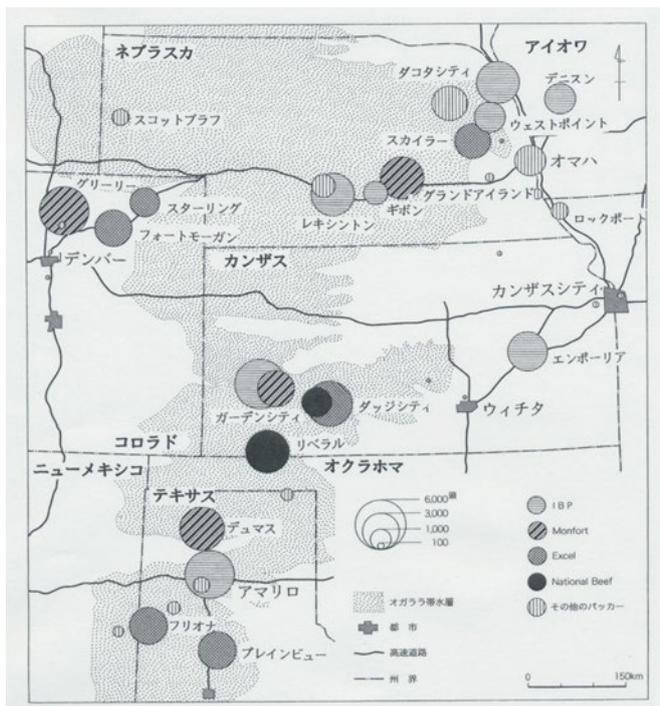


図1 アメリカ合衆国ハイプレーンズにおける牛肉加工工場の規模別分布（1990年代後半）
 (矢ヶ崎典隆ほか編『アメリカ大平原—食糧基地の形成と持続性—』古今書院、2006年、
 図6. 3 ハイプレーンズにおける牛肉加工工場の規模別分布（92頁）より引用
 古今書院：転載許可:2021年10月11日)

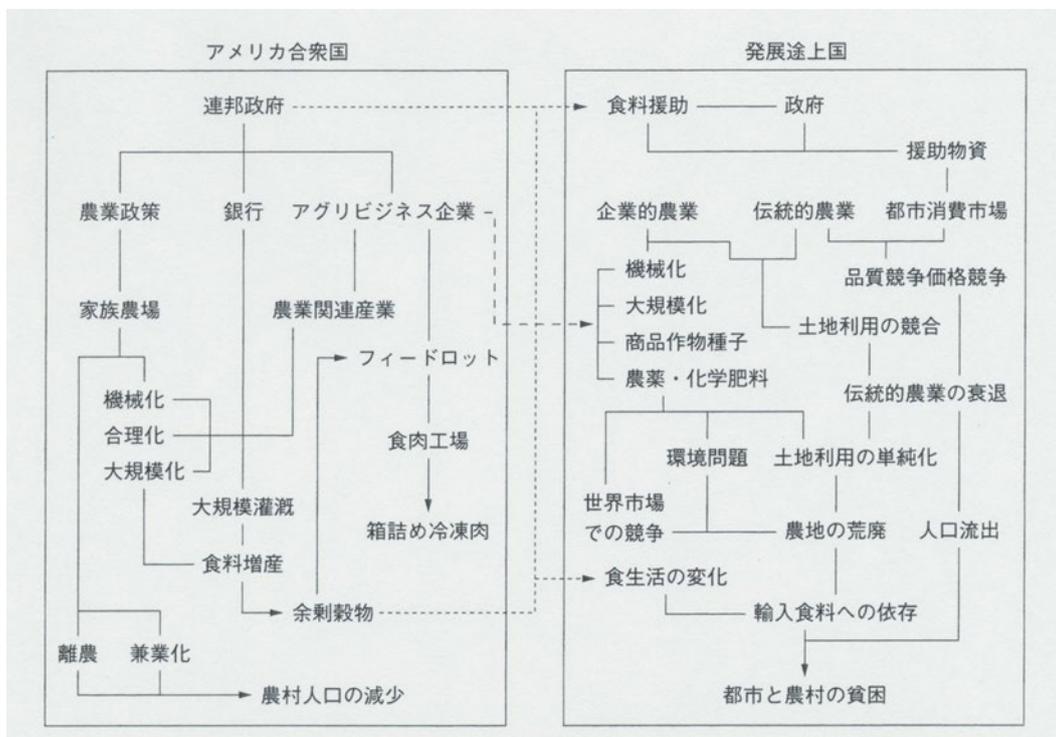


図2 アメリカ合衆国の農業と発展途上国の農業
 (矢ヶ崎典隆編『世界地誌シリーズ4 アメリカ』朝倉書店、2011年、図5.3.p. 72より引用
 朝倉書店：転載許可、2021年10月13日)

参考文献

- ニーン, K. 著, (中野一新監訳) 1997. 『カーギル—アグリビジネスの世界戦略—』 大月書店
- バーバック, R. & フリン, P. (中野一新・村田武監訳) 1987. 『アグリビジネス—アメリカの食糧戦略と多国籍企業—』 大月書店
- モーガン, D. (喜多迅鷹・喜多元子訳) 1980. 『巨大穀物商社—アメリカの食糧戦略のかげで—』 日本放送協会
- 矢ヶ崎典隆『食と農のアメリカ地誌』東京学芸大学出版会, 2010年,
- 矢ヶ崎典隆・斎藤 功・菅野峰明編著『アメリカ大平原—食糧基地の形成と持続性—』古今書院, 2006年
- 矢ヶ崎典隆編『世界地誌シリーズ4 アメリカ』朝倉書店, 2011年
- 矢ヶ崎典隆編『移民社会アメリカの記憶と継承』学文社, 2018年